

みなさん、こんにちは。2730 ジャパンカレントロータリーEクラブ第 28 回例会を開催いたします。前回例会に引き続きロータリー文庫(www.rotary-bunko.gr.jp/index.htm)でデジタル化された資料から、「世界理解月間にあ たって」2640 地区成川守彦パストガバナーの月信から 1962 年の WCS( World Community Service)活動の第 1号についてまで引用させていただきました。今回も後段について引用させていただきます。

1963 年、カール・ミラー会長の時、数名のロータリアンが選ばれて、RI の委嘱を受け、夫々南北の問題解決のため、地球上の各地域に派遣されました。2680 地区深川 PDG のお話によると、

- ①或るロータリアンは、南米のホンジェラスで農業用灌漑の技術を教え、
- ②或るロータリアンは、初等教育の問題を担当しました。
- ③日本からは、姫路の斉木亀次郎氏(1968-69DG)がインドのデリーへ行き 6 週間の中小企業研修を実施しました。

しかし、これらの試みは失敗しました。

何故失敗をしたか、

- ①参加した人たちの心構えの問題、先進国の人が開発途上国の人に、慈悲心を持って臨んだのではないかということ
- ②言語の障害
- ③風俗や習慣、物の考え方の相違があった。

そこで、RI は、この方向をあきらめ、団体奉仕、金銭奉仕を主軸とする WCS に転向したのです。すなわち、1966 年、RI は WCS 活動に対する例外的措置 として、1929 年にダラス大会において決議された財政的援助要請の制限条項[決議 29-12]を撤廃して、金銭的援助を可能にしました。そして、RI の仲人機能(ニーズを要求するクラブと提供するクラブの登録)を使ったのが、現在の WCS です。

[World Community Service](1966 年 RI 理事会)

財政的な問題を含むか否かを問わずに、特定の WCS 活動に関しての協力要請がロータリー地区やクラブからあった場合、特定のクラブまたは特定された地区のみ を対象とし、すべての地区やクラブが対象にならない場合には財政援助要請に関する決定事項に記された「制約条項」にはあたらないとして援助が受けられるようにする。

世界社会奉仕プロジェクトも素晴らしい活動であるが、世界社会奉仕が最終的に目指すものは、相手国の自力校正、独立独歩 でなければなりません。相手国のクラブが労力と金銭を最大限に捧げ、なおかつ及ばないところを我々が援助するというのが本筋であります。しかし、現実はずしもそうではなく、我々の方にもただ乞われるままに金銭や器材を寄付して事終われりとする、安易な態度があります。そして我々が奉仕だと思ってもそれはいたずらに相手の援助願望を助長するに過ぎないという結果に終わっていることがあります。考えねばならないことです。

ロータリーの国際奉仕の基幹となる思想は、国家、思想、宗教などの要素が複雑に入り混じって、現実には一つとは言えない世界をロータリアンの Fellowship に基づいた相互理解によって一つのものにして、恒久の世界平和を目指そうとするところにあるのです。

変化とはロータリー本来の資質です。創始者のポール・ハリスは 1930 年 6 月 24 日のシカゴ国際大会で、含蓄に富む次のような言葉を述べました「ロータリーが、その運命を適正に実現していこうとするなら、ロータリーはいつも進展し続け、時には改革的にすらならなければなりません」国際奉仕も変化しました、現ロータリアンはその歴史を知り、変遷を知り、現在のプログラムを理解しなければなりません。

以上、ロータリー文庫にある資料から前回、今回の2回に分け「世界理解月間」についてご紹介させていただきました。

現在、私たちのクラブでもロータリーデーの取り組みとして鹿児島でのポリオ撲滅のための募金活動を行い、委員会では宮崎でのロータリーデーについて話し合いがされているところであり、今後も様々な奉仕活動について奉仕プロジェクト委員会を中心に行われていくと思います。その一助として世界(相手)のことを知るところからプロジェクトを組み立てていけたらと思います。今後ともよろしくお願いいたします。